



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

グローバル人材育成の礎づくりとしての学校経営

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤,信彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174096

グローバル人材育成の礎づくりとしての学校経営

前ブラッセル日本人学校 校長

愛知県豊田市立逢妻中学校 校長 近 藤 信 彦

キーワード：グローバル人材の育成、交流学習、校外活動

1. はじめに

日本人学校の児童生徒ほぼ全員が、父親の海外赴任に帯同し、帰国時の教育面での円滑な接続を考慮して日本人学校に通っている。しかし、その実態を見てみると、家族での思い出づくり以外に本人の「力」となって日本に持ち帰ることのできるものは何だろうかと問い直したとき、明確な回答が見えなかった。

そこで、「外国で生活したことがある」という受動的な状況から「外国で生活してこんなことができるようになった」という能動的・積極的な学校生活を送ることができるようにするためには、どのような学校づくりを進めればよいかという視点で、学校力の総点検と改善を試みた。そのなかで以下3点に絞って記述する。

2. 教師の授業力向上

(1) JSB（ブラッセル日本人学：The Japanese School of Brussels a.s.b.l.）メソッドによる授業フォーマットの統一

全国から派遣される教員は、意欲は高いものの、そのキャリアだけでなく、地域の教育的特性に差がある。それは、好都合である場合もあるが、そうでない場合もある。

そこで、キャリアの差、地域差や校種、教科の違いを埋めるために、授業に関しては、共通のフォーマットとしてのスタイルを確立した。すべての教科領域において、それにそって授業を行うことを提案し、それをよりどころとしながら授業研究・授業実践を進めていった。

まず、授業の各段階の目的を明確にし、いくつかの方法をサンプルとして提示する。（仮にブロック学習と命名）それを踏まえながら授業研究を行うことで、共通の視点ももて、より効果的な分析を可能にすることができた。

(2) 現地教材の開発

後述の国際力にもかかわるが、「ここにあることを最大限に生かす」というテーマのもと職員から提案のあったテーマである。

学校外に直接でかけ、魅力的な素材を見つけ、単元構想を起こす。これは一連の「素材探し⇒教材化⇒研究授業⇒分析と共有化」という正に自主教材作成の研修となるが、その経験は未来につながり、また自分の手作りとしてのよい財産ともなった。

例 国語：ベルギーの民話（総合で劇化）、算数：ベルギーの王様からの手紙

音楽：『ウォータールーの戦い』の鑑賞、家庭科：ベルギーポテトの特徴を生かした調理、

総合：プロカント（古物市）について考える など

(3) ミニレクチャー

教育委員会主催の研修会など研修の機会が全くない3年間を過ごす派遣教員のために、定期的、また職員の求めに応じて不定期に、校長による授業力向上基礎講座を実施した。そのほとんどは授業の基礎基本のレクチャーであるが、実際には実践事例を紹介したり、その場でやってみたりという活動も随時取り入れた。

テーマとしては、話術、板書、発問、ブロック学習、アイリス学習（総合…）の進め方、話し合い授業の作り方など、時には通知表所見の書き方や保護者会の進め方など多岐にわたって、とり上げた。

(4) 授業研究会

ブロック学習の実践や現地教材を取り上げた授業の研究・分析会を年間随時行ってきた。

初めのうちは、異校種、異教科などに抵抗感があり発言にためらいのあった職員も、共通の視点もてるようになったことで、積極的に分析にかかわることができるようになってきた。

(5) 学校訪問 ～ 近隣日本人学校への派遣

ベルギー国に一つしかない日本人学校の中での研修は、外からの情報が乏しく教育活動の改善ができにくい。そこで、近隣の学校にお願いし、職員を派遣した。

デュッセルドルフ日本人学校では運動量の保障を中心に、アムステルダム日本人学校では現地校・インター校との交流学习を中心に研修させていただいた。いずれの学校も歓待していただき、職員は大いに触発され、有形無形のお土産を持ち帰ってきた。

3. 児童生徒の国際力向上

(1) 日本力の涵養

① ことわざ通り ～ 通るたびに楽しくドリル

体育館、更衣室、運動場への通路は、全校児童生徒が必ず通るメインストリートである。この壁面を使って、百人一首、ことわざ、熟字訓などを掲示し、子供たちの興味を引き付けた。

その一部にはマスキングを施し、子供たちは楽しみながら、クイズ形式で日々、日本語の基本語彙や基礎知識を身につけていった。

② ジャパニーズウィーク ～ 全員に日本体験を

3学期始めの1週間をジャパニーズウィークと銘打ち、登校時には『春の海』を流し、日本的な掲示物を用意し、雰囲気盛り上げた。

期間内には「ことわざ通り」で覚えた百人一首をかるた会として、競い合う機会を持った。

また、保護者の協力を仰ぎ、呈茶会として全校児童生徒に抹茶体験を設定した。

さらに、日本の伝統遊びの会を全校展開し、コマ回し、羽根つき、福笑い、けん玉、お手玉おはじきなどで「日本」を満喫した。この経験は現地校・インター校との交流にもつながっていった。

③ 企業戦士に学ぶ ～ 職業講話〔欧州で活躍する方々から学ぶ〕

国内のほとんどの学校が実施している職場体験学習は、ベルギーでは法に阻まれて実施できない。

そこで日本人として欧州を業務の舞台として活躍している第一線のビジネスマンをお招きし、その苦労や喜び、やりがいなどについて語っていただく機会を設定した。

ある年には、EU大使がご快諾くださり、子供たちの前で気さくにご講演くださるという貴重な機会をいただくことができた。

④ 感動との積極的な出合わせ

在外にいると日本を代表して世界で活躍する日本の方々と出会う機会に恵まれることが多い。

その際、先様から訪問を打診されることもあり、その提案を極力受けるようにしてきた。また、そうでない場合も、こちらから積極的にオファーし、機会を設定してきた。

合唱、器楽演奏、サッカー日本代表選手との交流などいずれも超一流の日本人の皆さんとの出会いは、感動と同時に将来の夢を育む好機となった。

(2) 国際力の充実

「ここにあること」を最大限に生かすために様々な活動を試みた。授業・学校行事を校内に閉ざしてしまうのではなく、可能な限り校外のものや人に触れ合う時間を生み出すよう点検・見直しを図った。

① 校外学習・活動

ア 教会での合唱祭

合唱祭は継続的に行われてきた学校行事であった。それを学校から徒歩5分程度の教会にお願いし、教会の中で行うようにした。

幸い大きな教会で、保護者全員に座って観覧していただくことができ、最高の雰囲気の中で行うことができた。

イ エスキスデー（写生大会）

気候が穏やかで安定している6月にブリュッセル中央にあるサンカントネール公園で写生大会を実施した。警察や保護者のバックアップをいただきながら、日頃何気なく目にしている光景をよく見ながら絵を描くことに取り組みながら、いい時間を過ごすことができた。

ウ バスケットボール交流

本校では地元校のシステムに倣い水曜午後は授業を実施していない。

本来はその時間を有効に使い、地元の子供たちと、クラブ活動などを通して交流ができるようにとの開校当初からの思いがあったようである。

しかし、実際にはなかなかその時間を有効に使えないものもある。そこで、希望者を募り、天候に関係なく（インドア）、少人数でできるバスケットボールに種目を絞り、水曜午後に練習会をもった。

そのチームを母体として、インターナショナルスクールとの親睦試合を設定した。子どもたちは初めての対外試合に緊張していたが、勝利することも多く、以後の活動の励みとなった。

② 交流学习

本校では、伝統的に様々な学校と交流させていただいていた。しかし、同一校と継続的に交流することでよりよい交流ができると考え、その方針で相手校を再度吟味していった。

おりからの「日本ブーム」も追い風となり、複数校がこちらの希望する交流に同意を得、その準備を始めることができた。

今後交流内容と方法を吟味しながら、「ベルギーの友達づくり」をテーマに、実践を深めていく。

③ ベルgianウィーク・ブリティッシュウィークの活動

ジャパニーズウィークと同じ趣旨でベルギー人スタッフに「ベルgianウィーク」の企画を依頼した。

当初はイメージを説明しながら進めていたが、そのうちに彼らなりにイメージを膨らませ、音楽、美術、調理など、様々な切り口で子供たちを引き付ける活動を展開してくれ、1週間、校内がベルギーモードに満ち溢れた。

4. 学校を取り巻く教育力の活用

(1) 外部との関係

① 地域（コミュニケーション）との連携

ア 地元カーニバルへの参加

毎年春（3月）には、日本人学校のある地区（コミュニケーション）でカーニバルが行われる。赴任当初は展示参加をしてほしいという依頼があり対応していた。



チョコレート工場での体験



エスキスデーの様子



現地校との交流会

展示参加だけではと思い、参加の可能性を打診したところ、パレードへの参加を快諾してくださった。様々な意匠を凝らしたチームが思い思いのパフォーマンスをしながら町のメインストリートを練り歩く、その一つの団体としてエントリーできたことは、地元の皆さんに受け入れられたということでもあり、日本人学校の新しい年間行事として根付いていくと良いと願っている。

イ 地元中学校との連携模索

毎年運動会を地元のスタジアムで実施している。ベルギーの方々にとっては集団で行う「運動会」は珍しいもののようで、大変興味深く参観して下さる。そのなかで、日本人学校の児童生徒の態度が非常に良いと高い評価をくださっている地元コミュニティのスポーツ担当から、中学生レベルのスポーツ交流をしないかと提案があった。時期や内容について1つ1つ協議を進めることになり、協議を継続している。

ウ 地元警察への依頼と対応

学校外の諸活動については、潜在的なリスクを伴う。そこで、地元警察に警備をお願いしたところ、快諾をいただくことができた。

合唱祭もマラソン大会も、さらには日常的な学校周辺パトロールも実施してくださっている。

お礼として年度末の感謝の集いにお招きしたところ、署長さん始め、顔なじみのお巡りさんが参加してくださり、笑顔の交流ができた。

エ 「おやじの会」

出向社員は忙しい。学校に来たくてもなかなか時間が取れない。そこで土曜参観を設定し、父親にも参加を呼びかける。さらに父親の力を借りて、奉仕作業をお願いしたところ快く受けてくださった。

そんな中、おやじの会として活動をしようという機運が高まり、PTA主催行事におやじの会として参加するなどの活動が徐々に広がっていった。

ある父親からは、「母親同士はネットワークができるが、父親同士はなかなか知り合う機会がないので大変いい機会だと思う」との声をいただいた。

5. おわりに

グローバル人材の育成は大きな課題である。国内勤務のときは、英語の力をつけることからか程度の漠然とした思いでいたが、日本人学校での勤務を通して、国内でもできることは多いと認識を新たにすることができた。

「言語活動」「アクティブラーニング」など学校現場へのリクエストは年々高まっているように、子供が本当に楽しいと思えるのは「主体性」ある学びのはずである。

まず（日本人としての）自己を確立し、（異文化としての）他者を理解し、自他の間にある距離を「調和」という力をつなぎ、自分も相手も居心地のいい状態を生み出す力をつけることができれば、そのときグローバル人材の誕生となるのではないだろうか。



交流を終えて